

令和5年度 おへんろつかさ養成講座第6回資料

「四国遍路による人格形成」

講 師：香川大学名誉教授

大 賀 睦 夫 氏

実施日：令和6年1月14日（日）

場 所：前山公民館

四国遍路による人格形成

1. 四国遍路とは何か？ 典型的な遍路動機と自己変容

よく知られた遍路の俳句から

お遍路の誰もが持てる不仕合わせ 森白象

百薬に優る遍路に出でにけり 鶺鴒政一

～遍路は癒やしの旅

四苦八苦：配偶者を亡くした。離婚した。失業した。財産を失った。病気になった。学校をやめた。会社をやめた。定年など人生の区切りがきた。

経済的（社会关系的）問題 → 福祉政策

心の問題 → 癒やし・自己変容の必要性 = 四国遍路

2. 遍路体験記五選

安田あつ子『お父さんと一緒に四国遍路』文芸社、2008

夫の死 → 感謝を忘れず笑顔で生きていく

垣添忠生『巡礼日記－亡き妻と歩いた600キロ』中央公論社、2016

妻の死 → 悲しみを経ることによって人格に一層深みが増す

岡田光永『十五歳のお遍路－元不登校児が歩いた四国八十八ヶ所』廣濟堂出版、2005年

不登校 → 将来は教師になりたい、不登校児の支えになりたい

高群逸枝『娘巡礼記』岩波文庫、2004

恋愛の悩み、病気の悩み → 何ものも求めず、運命に身をまかせる生き方を知る

高久ひとし『へんろ長調のぼり坂』2005

妻の死 → 徐々に日常生活を取り戻す

3. 四国遍路における人格形成

(1) 遍路における男性性と女性性

理想の人格＝強さと優しさを兼ね備える。

人格形成は男性性と女性性の統合である。（ユング）

易経の太極図、錬金術の両性具有など、洋の東西を問わず、これが人格形成の目標とされてきた。（湯浅泰雄）

男性の遍路イメージ 遍路はきびしい修行の世界

女性の遍路イメージ 遍路は慈悲に満ちた世界

～男性と女性ではかなり異なる遍路体験をしている。（馬淵公介氏の証言）

(2) 遍路が育む男性性と女性性

男性性を育む諸要素

長距離歩行、急峻な山道、暑さ・寒さ・雨・風に耐える、ハプニングへの対処（道に迷うなど）

「私も、禅僧の端くれとして、一度は行脚を経験しておきたいと思った」青野貴芳『四国巡礼葛藤記』

「遍路との闘いはすさまじい。七転八倒の苦行である」。森哲志『男は遍路に立ち向かえ』

「いくら単調だろうが、変化に乏しかろうが、歩くしかない。こうして歩いているうちに土佐に修行の道場という名前のついている理由が納得できた。そして修行とは、要するに耐えることなんだと自然に思った」。小林淳宏『定年からは同行二人』

「屋根の下で寝られることが、こんなに有難いことだとは思わなかった」青野前掲書

女性性を育む諸要素

やさしい自然の恵みを楽しむ

安田前掲書

出会いの喜び

「会ったり、別れたり、さまざまの人生を歩いている人たちにめぐりあいます。お互い名を告げずとも、遍路宿の一夜の間わず語りに泣きあい、お互いの上を折りあい、拌みあう、そこに相互合掌の姿があります」。手束前掲書

「(いっしょに野宿した老紳士と別れる時) あなたみたいな若い友達ができて嬉しかった。これからのあなたの旅がすばらしいものになるよう祈っていますよ。そう言って握手を求めた。ぼくの頬に思わず涙がこぼれた」早坂隆

お接待

お遍路さんがいちばん感動する経験がお接待

お接待（隣人愛）の輪が広がる

遍路とは美しい心に触れる旅。

若者がくれたお接待のジュースを飲んで「突然、何がどうしたのかわからないが、これまで経験したこともないような大粒の涙が溢れてきた。どうしたんだ、なんなんだこれは。だがその大粒の涙は、あとからあとから溢れてきてとまらない」。馬淵前掲書

「遍路の旅は人の心の美しさに触れる旅でした。・・・遍路の間にいただいた温かいお接待に報いるためにも、大きな心をもって人に接していきたいと思っています」。吉田哲朗『ぐうたらじじいのお遍路日記』

家族愛

「この道を昔、母が歩いたんだ。病気の自分のために歩いたんだ、それと同じ道をワシは今歩いている。そう思うと胸がつまりそうになったもんだよ」。早坂前掲書

「足摺山の一夜」和田性海『聖跡を慕うて』

「遍路とは家族がひとつになることだった」。八十窪遍路ノートより

「私たち夫婦にとって、四十九日間のすべて寝食を共にしたことで、お互いの理解が深まり、これからのありようがわかった気がする」財津定行『お遍路は大師さまと三人旅―歩いて見つけた夫婦の絆』

無意識の導き、気づき（無意識の英知）

意識＝男性性（合理的知識） 無意識＝女性性（深層からの英知）

人間の能力の中に無意識の英知が眠っている。＝癒やしの力の根源

「なぜ歩き続けるのか。そう質問されたら、私は返事に困る」辰野和男『四国遍路』

「どうして歩いているの？いつも僕はこの問いにうまく答えることができない」早坂隆『僕が遍路になった理由』

「私の場合、この変身（鎌大師堂庵主）の機は何十年かけて、あるいは自分の意識の外の世界から、徐々に成ってきたように思います」。手束妙絹『お遍路でめぐりあった人々』

「世の中を生きていく上ですぐれた能力を持った人も、『悲しみ』を経ることによって、人格に一層深みが増し、他者の悲しみや苦しみに対する包容力も大きくなるのではないか？

『苦み』が味覚の中で、もっとも微妙で深みがある感覚といわれるように、『悲しみ』は人生につきまとう一種のスパイスのようなものかもしれない。垣添忠生『巡礼日記―亡き妻と歩いた 600 キロ』

「四国歩きは亡くなった人のための供養では決してないなと感じた。・・・本当は生き残った側の魂を鎮めるレクイエム、生き残ったものを応援するエールの旅である」「葉っぱのフレディからの引用」高久ひとし『へんろ長調のぼり坂』

4 男性性と女性性の統合

岡田光永氏の事例

「中学校の規則が窮屈だったのと単純な勉強嫌い」→「僕は将来、教師になりたいと思っている。・・・僕と同じように、学校に行くことへの意味を見つけられずに悩む子供は絶対にいるだろう。そんな子供たちの支えとなっていきたいと思うのだ。・・・これまでの僕は人と真

正面から向き合うのが恐かったが、今回の八十八ヶ所巡礼を通して、人と接することの素晴らしさを学んだ。『15歳のお遍路―元不登校児があるいた四国八十八ヶ所』

安田あつ子氏の事例

「四国遍路は人生そのものだった。難行苦行どころか、体と心に栄養を頂き、人生の縮図を見聞できる素晴らしい『学び舎』だった。「長いアスファルト、ゴロゴロの山道、悪天候や炎天に、私たちは鍛えられたと共に、お四国の人々と大自然に触れながら、救われ、癒やされて行った。そして、人、動物、植物、太陽、水、空気、・・・周りにある無限の恵みに支えられ、教えられ、育てられながら、生きさせて頂いていることを実感した。「自分の非力も省みず、自力で生きようと本気で思っていた私は、何て傲慢だったことか。・・・自力で生きようなどと意地を張らず、他力によって生かされている感謝を忘れずに、笑顔で生きていく」。『お父さんと一緒に四国遍路』

高群逸枝氏の事例

遍路動機：当時、脚気にかかり、神経衰弱におかされ、また恋愛し、婚約したものの、自分は結婚する資格のある人間かどうか迷いがあった。(極端に感激したり、懊悩したり、泣いたりするという不安定な心の状態)

遍路を終えて：八十八ヶ所の道には、ずいぶん険しいところもあったが、私はめげなかった。どんなどころもさけることはなかった。ここでは多くの遍路といっしょになったが、私は完全に、それらの人達と同化した。私はここで何もかも求めず、来る運命に身をうちまかせる生活を知った。・・・飛ぶものは飛べ、去るものは去れ。流れんと欲さば流れよ。消えんと欲さば消えよ。何事もただそのままに。『娘巡礼記』

近藤優氏(先達)の事例

托鉢遍路の心構え：善い事があればお大師様のお恵みと思い、そうでない時は戒めと解釈し、何事も有難いと受け止めることにしました。

遍路を終えて：奥さんやお婆さんと何時間も楽しく対談し、新しい綺麗な布団で寝させてもらい、人の情けの温かさと布団の暖かさに感激し、熱いものが頬を伝わりました。・・・人の情けと試練の野宿、私には両方とも有難いことであります。『四国遍路托鉢野宿旅』

まとめ

現代社会は過剰に男性性を求められるアンバランスの世界である。

遍路には男性性と女性性の両方がある。(心と体、意識と無意識を活性化)

遍路をとおして、男性性と女性性の調和のとれた心を取り戻すことができる。